



中華人民共和国

日中の架け橋として

石森 大地さん(42期生)

国際教養学部アジア学科

私は今、交換留学時代の縁もあり、中国は南京の南京大学で日本語講師をしています。中国、それも南京

と言うと歴史上の問題もあって、なかなか日本人には暮らしにくい場所なのではと思われがちですが、むしろそのような地域だからこそ、真剣に日本という国に向き合ってくれる学生たちが多く感じます。実際、昨年ニュースで上がったような暴動もなく

平和に暮らしています。もっとも、最近では中国に馴染み過ぎたのか、自分が日本人だと教えても「本当に?」などと疑われてしまうのが悩みとなっているぐらいです…。

いずれは日本に戻って、追大での学生時代に大変お世話になった先生方と一緒に仕事をするのが夢です。そのためにもこちらでもっともつと経験を積んでいかなばと奮戦しています!



教え子たちとともに。中央が石森さん。



中国ならではのコンビニ!? セブンイレブンならぬイトゥエルブ…。

“To the world stage”

舞台は世界だ!

グローバルに活躍している卒業生

グローバルキャリアコースが開設され、世界で通用する人材の育成にますます力を入れている追手門学院大学。追大での学びや体験がきっかけとなり、世界各地で活躍するようになった卒業生たちの姿を紹介する。



カンボジア王国

カンボジアで地雷を撤去する

古川 純平さん(32期生)

文学部イギリス・アメリカ語学文学科



地雷撤去はほとんどが手作業で。人員も資金も不足しており、今のペースでは全ての地雷を撤去するのに100年以上かかると言われている。

い地雷で片足を失い、希望も奪われている。その気持ちを少しでも楽にできれば…。そして、地雷被害者の心をケアするためのラジオ番組を作ろうと決意したのです。

「将来何をしたい? どんな人物になりたい? 生まれてきた意味は?」…学生時代いつも考えていました。そして、出した結論が「生まれてきた意味は自分で作るもの」「どれだけ人の役に立ったかで自分の存在価値が決まる」でした。

地雷被害者から、「おまえがいてくれてよかった」と言ってもらえるよう、これからも活動を続けていきます。

大学卒業後、国際NGOカンボジア地雷撤去キャンペーン(CMC)でボランティアを始めました。26歳の時には、初代現地駐在員として地雷原での小学校建設に携わり、多くの地雷被害者と出会いました。義足リハビリセンターで知り合った同世代のダエン君とは特に仲良くなりましたが、一度も心の底から笑っている彼を見たことはありませんでした。楽しく話していても、「おれはチュンピカ(身障者)だから…」といつも顔を落とすのです。自分とは何の関係もな

古川さん(左)が立ち上げたラジオ番組は、多くの被害者リスナーの心に響き、現在も継続されている。



マレーシア/中華人民共和国

海外生活通算38年

立花 元彦さん(1期生)

経済学部経済学科



追手門学院大学卒業後に松下電器産業に入社、28歳でマレーシアの工場に転勤となり、経理、総務、電算化を8年半担当しました。その後は外地間転勤でタイ国バンコクの工場に異動。こちらで6年半勤務した後、1989年に43歳で退社しました。その後マレーシアの現地会社に就職し、経理、総務、電算化、営業を担当。61歳となった2008年か

らは中国・広東省深圳市の同社子会社の経営指導を行っています。通算38年間海外で働いてきたこととなります。

現在働いている中国は、世界第2位の経済大国となりました。しかし、所得格差拡大や公務員汚職、高額所得者の資産海外持出、マナーの悪さ、模造品の横行など数多くの問題を抱えたままです。一方、輸出大国日本は韓国に追いつかれ追いやられ、「家電」「自動車」「芸能」その他多くの分野で輸出大国の旗印を降ろし始めています。何故やられてしまったのか? しっかりと考えていかなければなりません。



個々人の適性は、本人には解らない事が多いと長い海外生活で実感。